



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2551 号 2015.7.25 発行

社説：空き家対策 地域の財産ともしたい

中日新聞 2015年7月24日

倒壊の危険性などがある空き家について、自治体が撤去命令を出せる特別措置法が全面施行された。防災や防犯、近隣環境に配慮した対策に生かし、新築に偏った住宅政策を見直す機会としたい。

空き家は年々増えている。二〇一三年には全国で八百二十万戸で、住宅七〜八戸に一戸の割合に上る。賃貸用でもなく、売却予定もない一戸建てがほとんどで、少子化で人口が減っているのに供給が多すぎるのが背景にある。

居住者がいないだけでなく、所有者が亡くなった後に放置される場合も少なくない。

老朽化した空き家は、地域の防災や防犯、衛生環境に悪影響を与えかねない。条例を定めて修繕や撤去の勧告を出す取り組みを進めてきた自治体も増えていたが、その努力には限界があった。

住宅が立つ土地の固定資産税はさらに地に比べて六分の一になる。その税優遇措置が空き家放置の要因になっていたが、特措法では自治体の権限を強化した。

近隣に悪影響を与える物件を「特定空き家」とし、自治体が所有者に修繕勧告や撤去命令を出せる。勧告に従わずに改善しない場合は優遇対象から外せる。強制撤去もできる。

日本では持ち家志向が強く、新築に偏ってきたことが、空き家を増やす原因になってきた。住宅総数は六千万戸で総世帯数を上回る。空き家を減らすには、欧米のように中古住宅に手を入れながら長く活用していく、そんな住宅政策への転換も必要だろう。

空き家は、東京や大阪、愛知などの大都市圏にも多い。決して地方都市の問題ではない。

空き家の物件を貸し出したいくても、リフォーム費用がない場合、「借り主負担DIY型」と呼ばれる契約方法を活用する手もある。貸主が家賃を相場よりも低く設定し、その分で借り主がリフォームしたりする方法だ。こうしたやり方で、足りない介護や福祉施設、児童保育、地域交流の場に転用できないか。

地方の自治体には、空き家情報をデータベース化した「空き家バンク」で賃貸情報を発信し、新しい住民を呼び込む工夫を凝らしているところもある。

茨城県のグリーンふるさと振興機構は「田舎暮らし相談窓口」を設け、移住者用の住居を整えたり、交流や移住の希望者に情報を提供している。

空き家を地域の財産として活用する視点を大切にしたい。

19種類の薬処方での90代女性死亡、過剰摂取原因か 宮崎県内の有料老人ホーム

朝日新聞 2015年7月24日

県は23日、県内の有料老人ホームに入所していた90歳の女性が6月、薬の過剰摂取が原因で死亡したと発表した。新たに処方された2種類の薬について、職員間での申し送りができなかったという。県は同日、県警に経緯を報告した。

県によると女性は1年半ほど前から同施設に入所。認知症や高血圧、リウマチなどの持病があった。17種類の薬を服用していたが、6月3日に新たにリウマチの薬と、貧血の

薬の2種類を病院で処方された。

同施設の職員が薬局で他の薬と一緒に新しい薬を受け取ったが、薬の仕分けを担当する別の職員2人に新しい薬について伝えず、担当の職員も薬の服用方法や注意事項などを確認しなかったという。女性は6月13日に高熱などの症状が出て、25日に死亡した。

県長寿介護課は「2012年から高齢者施設で誤薬があったとの報告は3件あるが、死亡は初めて。今回は職員の申し送りが不十分だったことが原因だが、施設側は改善に取り組んでおり、行政処分は考えていない」と話している。

同課は23日付で県内の高齢者施設641施設に注意喚起を促す文書を発送した。

(佐藤幸徳)

LGBTが病気になると…… 遠藤まめた：連載「2歩先はゾンビ」

シノドシジャーナル 2015年7月24日

今年の4月。私は、だれもが「2歩先はゾンビ」である事実を発見した……！

それまで私はLGBT（セクシュアル・マイノリティ）当事者として社会から1歩分「マイノリティ」だったのだが、4月に難病持ちになったことが発覚し、もう1歩分「マイノリティ」になった。2歩先で垣間見えたのは、ゾンビの世界だった。ゾンビとは、すなわち「肉体的、精神的ならびに社会的に人間としてどうかと思う状態」のことである。

日本社会で「ダブル・マイノリティ」は、もはやオリジナルすぎる個人のことを指す。あまりに個性的すぎて、「個性」という爽やかな言葉には溶かしきれない状況がそこにはある。不覚にも「二歩分」進んでしまったとき、私やあなたには、いったい何が起きるのか。本連載は、そんなダブル・マイノリティたちの傾向と対策を綴っていきたい。

これは「そんなの関係ないよ〜」「1歩分だって進んでないよ」と思っている“フツー”や“マジョリティ”のあなたにも、ふりかかるかもしれない危機なのです。っていうか、たぶんあなた、“フツー”じゃないですよ！

LGBTであるということ

連載第一回は、私個人の「LGBT×病気」な体験から始めたい。

私はトランスジェンダーで、女の体で生まれたが、自分のことを男だと感じており、心身の性別が一致していない。幼い頃から性別をめぐるトラブルがあり、思春期には「おれは男だから制服のスカートをはきたくねえんだよ！」などと悪戦苦闘した。

しかし、子どもの頃には、性別への違和感を訴えても、どうせ一過性のこと、テレビやインターネットに影響されすぎているのだろう、思春期で脳みそが発酵している、といった程度にしか扱われなかった。合掌。

そんな世間の不条理を正すべく(!)、私は、教育現場や子ども支援に関わる人にLGBTを知ってもらおう活動を10年ほど続けてきた。すると、ここ数年はうっかり朝日新聞の「ひと」欄に出たり、本やテレビに出たりと、世間から話を聴いてもらえるようになった。

LGBTの問題への関心が高まるにつれ、子どもの頃には聴いてもらえなかったことを、今ではお金を払ってまで聴きたいと「大人」たちがやってくるようになった。

まるで、ストリートでギターをかきならして冷たい視線を投げられていた若者が、突然メジャーデビューを果たしたような状況の変化(ある意味、これもまた不条理)。

こうして、私は歳を重ねるにつれて、自分の望まない性別で振る舞うように強要されることが劇的に減り、トランスジェンダーである自分自身との付き合いについても「飼いやられた感」を持っていた。しかし、私は「もう1歩分」進んでしまったのだった。

カミングアウトする体力がない！

冬の終わりに「もうぼくわかんないよ」と近所の病院の医者に言われた。体温計が38.9℃を指しており、私だって意味がわかんないよと思った。なんだこれ。起きているのもつらく、院長が大学病院への紹介状を書いている時間がひたすら長く感じた。翌日には新幹線に乗ってシンポジウムで当壇する予定だったのに、こりゃどうしたって無理じゃんね。申

し訳なきで半泣きになりながらことわりをいれ、大学病院に行くと、大至急入院だと言われた。

昨年末から立て続けに感染症にかかり、熱がさがらなかった。髪は抜け、肌は荒れ、咳が止まらない。自己免疫疾患のひとつで、全身性エリテマトーデス（SLE）という難病だった。

こうやって書くと、いかにも「ご重体」だが、本人は体温計が壊れているのだと思いこんでいた。認識のズレというのは恐ろしい。のほほんとしているうちに、どんどん弱っていき、4月1日に私は某大学病院へと「収監」されたのだった。とんだエイプリル・フールだ。

トランスジェンダーの人口は300人～数千人にひとりと言われる。

SLEのほうは1万人にひとりなので、この状況、単純に計算すると300万人とか数千万人にひとりだ。『困ってるひと』著者の大野更紗さんは、ご自身が難病になったことを「難病のくじをひいた」と表現をされている。大野さんとは、昨年とある勉強会の打ち上げで偶然一緒になり、隣でごはんを食べる機会があった。そのときは「大変っすね～」と思っていたが、まさか一年後、自分のところにも飛んでくるとは思わなかったよ、くじ……！！

さて、ダブル・マイノリティな物語はここから始まる。私のゾンビ問題の中心は「話せない」ことだった。入院当初は具合が悪く、自分のニーズを伝える体力がなかった。入院という環境自体が初めてだったし、話すこともだるい。看護師さんにものを頼むのも慣れないから、「氷枕ください」というのが精いっぱい。

そんな環境の中で、「飛べない豚はただの豚」とい「カミングアウトのできない私はただの女体」で、私は戸籍上の性別のまま扱われるしかなかった。

「実は、自分はトランスジェンダーで……」と切り出してカミングアウトするのは、勇気や精神力、体力、もろもろのエネルギーを要する。たいていの場合、LGBTのことを相手は詳しく知らないなので、こちらが解説しなくてはいけない。さながらプチ講演のような状況になることもある。そんなことより、入院直後の私は、熱があり、だるくて眠りたかった。

入院センターというところで（洗濯をしなくて済むから楽ちんという）パジャマレンタルセットを申し込んだところ、ピンクのしましまパジャマをあてがわれることになった。戸籍上が女性だからだ。

しまった、と思ったが、変えてもらうために交渉する体力が無かった。「こんなピンク・パジャマ姿を友達や周りの人には見られたくないな」と頭によぎったが、切り出せない。そのままピンク・パジャマと共に時間がずっと過ぎていった。



ピンクパジャマをあてがわれゾンビ化する筆者

再び、合掌……。

医療費が数十万円も変わる

そして、ピンク・パジャマだけでは済まなかった。治療方針をめぐって、性別問題は大きく影響していった。

まず、ステロイドの投薬が始まるにあたり副作用についての説明を受けた。「女性の場合には、こういうのは気になるでしょうけれど…」と担当医は切りだして、毛が濃くなることやムーンフェイス(顔が丸くなること)、妊娠・出産によって症状が悪化する可能性のあることについて触れた。

私は、毛が濃くなることについてはむしろ歓迎だったし、妊娠・出産の予定は考えたこともなかったので、「あ、全然気にならないっす！」という感じだった。むしろ、眉毛やもみあげの濃くなることはウェルカムだった。その副作用なら、どんとこい。

その程度の会話のすれ違いなら、かわいいものだった。しかし、性別認識をめぐるすれ違いは、やがて大きな問題になる。

入院3週間目あたりに、治療のために毎月6万円の薬（未認可薬）をしばらく使うという話になった。

半年使えば 36 万円。しかも保険が効かないので混合診療という扱いになり、入院費用もかさむ。健気な若者(ビョーキだが)が払うには、あまりに経済的ダメージが大きい話だった。治らないビョーキへの心配に加えて、お金の心配もしなくてはいけないのかと思うと、暗澹たる気持ちになった。なんとかならないのだろうか。

薬について詳しく聞いてみたところ、担当医は「今ある認可薬だと、不妊のリスクがあるんだよ。若い女性にはオススメしないんだ」という。

「でも、子どもとか産むつもり全然ないですから」

「遠藤さん、そうは言っても、これからいい出会いがあるかもしれないでしょ？」

ああ、ラチがあかない…！と思った。

これは正直に言うしかないなと思って、自分の性別について、ここでようやく話すことになった。

いい出会いはありません！！

……もとい、トランスジェンダーの私は自分の体を使って子どもを持ちたいとは思わないし、私が好きになるのは女性なので「いい出会い」だろうが「悪い出会い」だろうが、子どもは持てないんだってば。

担当医の反応はフランクなものだった。

「なんだ、そういうことだったのか！早く言ってくれたら良かったのに。」

でもまあ言いづらいか、とって彼は笑った。

その後、改めて治療方針について確認したのち、不妊リスクを減らすための未認可薬(月額6万円)は、あっさりと別の薬へと代えられたのだった。こうして、医療費は大幅にカット。

カミングアウトしなかったら医療費が数十万円上乗せされるどころだった、という事実は、重たいものだった。たまたま体調が良くなってきたから、体力が戻っていたからカミングアウトすることができた。でも、入院直後のエネルギーでは出来なかった。偶然このタイミングだったからよかったものの、これがもっと体調が悪かったら、もし意識がはっきりしていなかったら、自分の意思は反映されることはなかっただろう。

そして、自分でコインランドリーをまわす余裕と体力が生まれた 4 月末、ようやく私はピンク・パジャマを「卒業」できたのだった。入院開始から数週間が経っていた。

傾向と対策：言葉を、握りしめておくために

この社会で多数派である人は、ほとんどの場合には、自分が多数派であることを意識することなく生活できてしまう。

日本のスーパーで食糧を買うときに「ああ、ここは日本のスーパーだ」と強く意識する日本人はあまりいない。多くの場合、「日本のスーパー」は「ただのスーパー」として認識される。というか、そもそも「日本のスーパーなのかどうか」なんてことを誰も考えたりもしない。しかし、もし外国に行ったら、状況は変わってくる。異国のお店であれば、自分の買いたい商品がなかったり、見慣れない商品が並んでいることに戸惑ったりするからだ。

私はトランスジェンダーというマイノリティとして、これまで異国のスーパーに紛れ込んだように生きてきた。多数派の人が「フツー」だと思い、通り過ぎてきた様々なものにつまずいてきた。子どもの頃には、それは男女で色の違うランドセルだったり、修学旅行で「女子」の一員としてお風呂に入るよう求められることだったり、制服だったりした。

大半の人には疑問さえ持たれない制度に、強烈な違和感を持ってしまう自分がある。黙っていても、自分に必要なものを得ることができない。それでは幸せに生きることができない。そんな中で、自分が多数派文化に「殺されない」ためには、マイノリティとしてのサバイバル・スキルとして、下記の三か条が決定的に重要なのだと思う。

- (1) 「自分が必要なものはこれです」と言葉で伝えられること
- (2) その言葉を訊いてくれる周囲の人たちがいること
- (3) そもそも、自分が必要なものが何かを比較検討できる環境

外国スーパーに例えたら、こんな感じだろうか。

(1)「米や豆腐がほしい」などというニーズを、母語ではなく相手に理解される言語で伝えること

(2) 店員に無視されないこと

(3) そもそも、その国で米や豆腐を要求することはワガママと思われるのか、フツの範疇にふくまれるのか、価格は高いのか、どこの店で聞けばいいのか、といった総合的な情報を得られること

私の性別問題に照らすと、

(1) 相手に理解される言語で、LGBT についてきちんと伝える

→「プチ講演」になる場合も少なくないことを思うと、具合が悪いときには難しい。

(2) LGBT への誤解や偏見、無関心にさらされると厳しい

→初対面の人たちに囲まれると相手がどんな価値観なのか分からずカミングアウトしにくい。

(3) 今ここで性別の話をするのは空気が読めないと思われるのか、話すことで自分の居心地がどう変わるのか、そもそも誰に話せば状況が変わるのかといったことの状況把握。

→入院という慣れない環境で、そこでのルールが分からず身動きが取れない。

という状況だった。

災害や病気、突然の事故など、想定のできないできごとが襲いかかることが人生には、ままたある。「話せなくさせられた人」が、再び自分の言葉で話せるようになるのに、時間を要することがある。

周囲のサポートや情報提供によって、安心して話しても大丈夫だと思えることで、ようやく言葉を取り戻せる場合もあるだろう。もはや、その状況では話すことができず、前もって手紙を書くことや、周りの人に意思を伝えておくことでしか、個人の想いが伝わらない状況やタイミングもある。

もしあなたが、何らかの理由で「1歩」進んでいる人だったら、病気や災害に直面したとき、あなたの言葉は届かないかもしれない。言葉を出す力がなく、言葉を生み出す余裕さえ生まれえないかもしれない。

だから、もし今なんかしら対処できることがありそうならば、作戦を立てておくことを、ピンク・パジャマ・ゾンビ経験者としてお勧めしておく。言葉を、握りしめておくために。

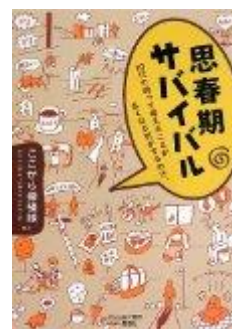
思春期サバイバル—10代の時って考えることが多くなる気がするわけ。



著者／訳者：ここから探検隊 出版社：はるか書房(2013-09) 定価：¥1,512 Amazon 価格：¥1,512 単行本(156ページ) ISBN-10 : 443418301X ISBN-13 : 9784434183010

遠藤まめた(えんどう・まめた)

1987年生まれ、横浜育ち。トランスジェンダー当事者としての自らの体験をもとに、10代後半よりLGBT(セクシュアル・マイノリティ)の若者支援をテーマに啓発活動を行っている。全国各地で「多様な性」に関するアクションや展開している「やっば愛ダホ!idaho-net」代表。



祖父母と子育て、秘訣は「親ではなく上司と思え」 日本経済新聞 2015年7月24日

「日本助産師会」と「NPO 法人 孫育て・ニッポン」は、祖父母を含めた家族と一緒に子育てする環境をサポートするため、毎月「楽しい子育て・孫育て」という講座を開いています。今回は、日本助産師会の岡本喜代子会長と孫育て・ニッポン理事長の棒田明子さ

んに、実家との上手な付き合い方について聞きました。

「日本助産師会」と「孫育て・ニッポン」は、毎月第1金曜日（1月と5月は第2金曜日）の13時30分～15時に、「楽しい子育て・孫育て講座」を開催している。参加者は母親、そして孫が生まれたばかりという女性たち

■祖父母を上手に子育てに巻き込んでいこう

——日本助産師会と孫育て・ニッポンは、なぜ「楽しい子育て・孫育て」という企画を始めたのでしょうか。

棒田： 子育てする上で、親は子どもをたくさん褒めたほうがいいというのは多くの方がすでにご存知でしょう。しかし、親以外の人に褒められることも、同じぐらい大切だっことは知っていましたか？



「あら、大きくなったわね」「元気があっていいわね」と褒めてくれる大人が多ければ多いほど、その子どもは伸びます。祖父母は、まさにそんな存在ですよ。だから、祖父母を上手に子育てに巻き込み、できるだけたくさん褒めてもらったほうがお得。「祖父母との付き合いは気を遣うから面倒」と、実家と距離を置くのはもったいないことなんです。



公益社団法人日本助産師会、岡本喜代子会長

岡本： ただ、今は親世代も働いているケースが多いので、昔のように引退したおじいちゃん、おばあちゃんとの関係をイメージすると、少し違ってきています。

だから、お互いに現状をよく話し合っ、どういうことが困っているのか、どういう風に関わってほしいのかということ、正直に伝える必要があります。そのお手伝いをするために、私たちは「楽しい子育て・孫育て」講座を始めたのです。

■育児の常識は、時代によって違う

——自分や夫の両親に子どもを預けるときは、どういうことに注意したほうがよいでしょうか。

棒田： 祖父母は子育て経験もあるし、家族だから「言わなくてもわかる」と思い、自分たちの子育て方針ややってほしいこと、やってほしくないことを祖父母に伝えていない場合が多いようです。何も伝えないまま預けて、あとで陰口を言うのはよくないですね。「あまり甘いものは食べさせたくない」というように、気になることがあれば、前もって伝えておくことが重要です。

ただ、妻からみて夫の親に言いつらいのは確か。そうならないために、夫の親には夫が伝えて、妻の親には妻が伝えるというルールを夫婦で決めておくとういことです。

岡本： 預けた後、きちんとお礼を言うことも大切。義理の親ならまだしも、実の親となると遠慮がなくなり、お礼を言わないまま帰ってきたりしていませんか？ 「孫はかわいいから、預けるのも孝行」と思っていないませんか？

祖父母に預けている間、子どもは親がいない不安でいっぱい。いつもの彼らとは、かなり様子が違っているはず。そんな子どもたちの相手をする祖父母は本当に大変なんです。しかも、親より体力がないから、想像以上に疲れます。

そんな祖父母の状況を思いやり、きちんと「預かってくれてありがとう」と口に出して伝えてください。



NPO 法人 孫育て・ニッポン理事長の棒田明子さん

棒田： 育児に対する常識の違いも理解しておく必要があります。

母乳育児や離乳食についての常識は、時代によって変わります。例えば、離乳食を与える時、昔はよくお父さんやお母さんが口の中で噛み砕いたものを食べさせたりしました。しかし今は、自分が使っているスプーンを使って離乳食をあげるのもよくないとされています。

だからといって、お母さんがおばあちゃんに対して「同じスプーンで食事をあげるのはやめて！」なんて厳しい口調で言ったら、すぐにバトルが始まってしまいますよね。

それを防ぐには、自分だけでなく、自分や夫の親にも最新の育児について知っておいてもらう必要があります。私たちが「孫育て講座」を開いているのも、祖父母世代の人たちに最新の知識を伝えたいと考えたからなんです。バトルにならないように、上手に伝えてみてください。

実は、これはお母さんにとってだけでなく、育児を手伝う祖父母にとっても、とてもいいことなんです。今の子育てがどう変化しているのかを知ってもらえれば、自信をもって子育ての手伝いができるようになりますから。

岡本： 育児には、時代によって変わる部分と、いつまでも変わらない部分があります。

例えば「人に優しくしましょう」というようなことは、時代は関係ありませんよね。そういうことを子どもに伝えていく上で、祖父母はとても頼りになります。祖父母の言葉を借りながら、子どもの情緒を上手に育てていきましょう。

——自分や夫の両親達と上手に付き合うコツがあれば、教えてください。

岡本： 子どもを預けるときだけ連絡するのでは、ご両親もおもしろくないですよ。ですから、ぜひ普段からこまめに電話してあげてほしい。そうして連絡を密にしておけば、子どもを預けるときもうまくいきます。実家が離れているから、なかなか親密になれなくて…という方もいますが、今や距離は大きな問題にはなりません。メールや電話を使えば、遠くにいても密につながることができます。いい間隔で声をかけながら、うまく関係を構築していきましょう。

棒田： もちろん、最初からうまくやろうというのは無理。お互いに探りながら、いい距離感を見つけていくしかない。あきらめず、根気よく続けること。それは夫婦も同じですよ。

ひとつ、コツを教えましょう。祖父母といっても、他人は他人と割り切ること。もちろん自分の親であれば血のつながりはありますが、それでも自分と同じではなく、別の人間。夫の親なら、なおのことです。だから、完全に分かり合おうというのは無理な話なんですよ。

ただ、全くの他人ではなく、自分より目上で身近な人であることは確か。ですから、祖父母は仕事の上司と同じだと考えてください。

上司とのやり取りを思い出せば、たまには聞き流すのも大事だということもわかりますよね。親ではなく上司だと思えば、自分の意図が 100%伝わらなくても当たり前で、50%うまくいけば上出来です。そういう風に、気軽に考えたほうがうまくいきます。

■妻と義母がけんかになったら夫はどちらも応援しない

——最後に妻が親とけんかになってしまったとき、夫はどうすればいいのでしょうか。

棒田： 基本的には、奥さんの味方でいてほしい。母親の味方になって、妻を責めるなんていうのは論外です。とはいえ、妻を応援するのもよくない。

——では、どうすればいいのでしょうか。

棒田： 黙って二人のけんかを見守り続けるのが一番。口をださずにただ見ているだけというのも、結構つらいかもしれませんが、そこは頑張って！ ここが、パパの腕の見せどころなんですから。

そして、ちょうどいいタイミングを見計らって、甘い物とお茶を出してあげればいいんです（笑）。

岡本喜代子（おかもと・きよこ） 同志社大学神学部、大阪大学医学部附属助産婦学校、国立公衆衛生院専門課程修了（保健学修士）。勤務助産師を経て、2004年6月に「おたふく助産院」を共同開業。日本助産師会の役職を歴任し、2011年より現職。

公社 日本助産師会 孫育て・ニッポン共催「楽しい子育て、孫育て講座」（毎月第1金曜日開催）<http://www.midwife.or.jp/kouza/kosodate/index.html>

棒田 明子（ぼうだ・あきこ） NPO 法人孫育て・ニッポン理事長、NPO 法人ファザーリ

ング・ジャパン理事。「母親が一人で子育てを担うのではなく、家族、地域、社会で子どもを育てよう」をミッションに、全国にて「子育て、孫育て、他孫（たまご）育ての講演、プロジェクトを行う。東京都北区赤羽コトニア内多世代コミュニティーカフェ「いろむすびカフェ」アドバイザー。産後のママをみんなでサポートする「1.2の産後」（2015年7月始動）プロジェクトリーダー。著書、共著に『祖父母に孫をあずける賢い100の方法』（岩崎書店）、「ママとパパも喜ぶ いまどきの幸せ孫育て」（家の光出版）。

（ライター 井上真花、撮影 勝山弘一）[日経DUAL 2015年6月12日付の掲載記事を再構成]

介護費軽減利用者の通帳写し、明石市は提出求めず 厚生省「事情聞きたい」

朝日新聞 2015年7月24日

介護保険施設での食費や居住費の負担軽減を受けている高齢者の資産を確認するため、全国の自治体が預貯金通帳のコピーの提出を本人に求めている問題で、兵庫県明石市は22日、提出を当面求めない方針を示した。代わりに資産の申告内容に虚偽がない旨の誓約書の提出を求めるといふ。

介護保険施設の食費や居住費の軽減は、昨年の介護保険法改正で、単身なら1千万円、夫婦なら2千万円を超える資産がある人は対象外になった。軽減を受けるには1年ごとの更新が必要で、今年から申請の際に資産を証明するものを提出するよう求められている。

厚生労働省は「必ず通帳の写し等の添付を求める必要がある」との運用方法を自治体に示したが、泉房穂市長は22日の記者会見で、「認知症で通帳を把握できない人もいる。提出の有無で認定するとかえって不公平になる」と指摘。今月初め、対象の約3千人にコピー添付を求めない申請書の用紙を発送したという。

高齢者ケア事業、再開発機に始動 武蔵小杉

朝日新聞 2015年7月24日

川崎市中原区の武蔵小杉駅周辺で予定されている日本医科大学地区の再開発を機に、同駅周辺では市と大学などが連携して高齢者ケアを主眼に置いた事業が動き出す。2023年度の完成をめどに高齢者も住みやすい街づくりを進めるほか、この夏から携帯端末を使った認知症の早期発見と予防の検証実験も始める。

武蔵小杉駅に近い同大地区は、広さ約5・2万平方メートル。再開発で高さ180メートルの高層マンション2棟に加え、商業施設や保育所などが入る低層棟2棟、新病院、看護系教育施設、小学校、公園が整備される。

このうち、市は低層棟の一部（約1700平方メートル）を大学側から無償で譲り受け、老朽化した老人福祉センターを移転。介護関連施設や、多世代が交流したり認知症や福祉製品の情報を得られたりするスペースも設ける。大学側も高齢者向け住宅やスポーツクラブなどの導入を進めるといふ。

また、富士通と同大の「街ぐるみ認知症相談センター」などは、スマートフォンやタブレット端末を使った認知症の早期発見と予防の検証に乗り出す。「物を置いた場所がわからなくなることがあるか？」といった質問を毎日送り、突然回答が途絶えたり、おかしい答えになったりしたら、安否を尋ねたり受診を促したりするメールを送る。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

